

【高齢者のありよう、役割に関する調査】

20歳～87歳の851人にアンケート。世代間ギャップと、超高齢社会の課題が明らかに

老後のライフスタイルの充実や高齢者の自立について調査・研究・提言する、特定非営利活動法人「老いの工学研究所」（大阪府中央区、理事長：西澤一二）は、高齢者のありようや役割について、年代による認識の差を明らかにすることを目的にアンケートを実施しました。20～87歳まで851名の回答があり、このたび結果がまとまりましたのでお知らせ致します。

1. 経済面・能力面で「高齢者は弱者ではない」と、高齢者の半数が回答。
60歳代～80歳代で、「経済的に弱者だ」「能力的に弱者だ」と回答した割合は、いずれも52%に過ぎなかった。「健康面で弱者だ」としたのは83%。
2. 高齢者の役割は「伝承」「体現」「交流」
高齢者自身も若手世代も、「知識・技術や伝統・慣習を伝えること」「規範やマナーの体現すること」「世代間の交流を行うこと」の3点を、高齢者の役割と認識。
3. 若手世代の高齢者への期待は、“若々しさでは”なく、“年の功”。
若い世代は、「IT機器を使いこなす」「アンチエイジングに励む」といった高齢者を望まず。「伝承」「体現」など、年の功を発揮してもらうことを期待。
4. 若いほど「高齢者を優遇しすぎだ」と考える傾向。高齢者も3割が同意。
「公的制度で、高齢者を優遇しすぎだ」「高齢者の政治に対する発言力が大きすぎる」とした割合は、若い世代ほど多いが、高齢者も3割がこれを肯定。
5. 生涯現役志向は低調。「生涯現役社会」の方針、浸透が進まず。
「生涯現役でいるべきだ」と回答した高齢者は、半数超にとどまる。生涯現役社会の実現という国の方針は、浸透していない。
6. 高齢者を健康面で弱者と考える人ほど、経済的にも能力的にも弱者とする傾向。
「高齢者は健康面で弱者か」に対する回答と、「経済的、能力的に弱者か」に対する回答には、明らかな相関関係があった。高齢者に対する誤解の解消が課題に。
7. 女性は長寿より充実度重視。「長生き自体に価値あり」とする高齢女性は30%
「長寿はめでたい」「長生き自体に価値がある」とする人は、60歳で大きく減少。充実度を重視するのは、男性よりも女性。

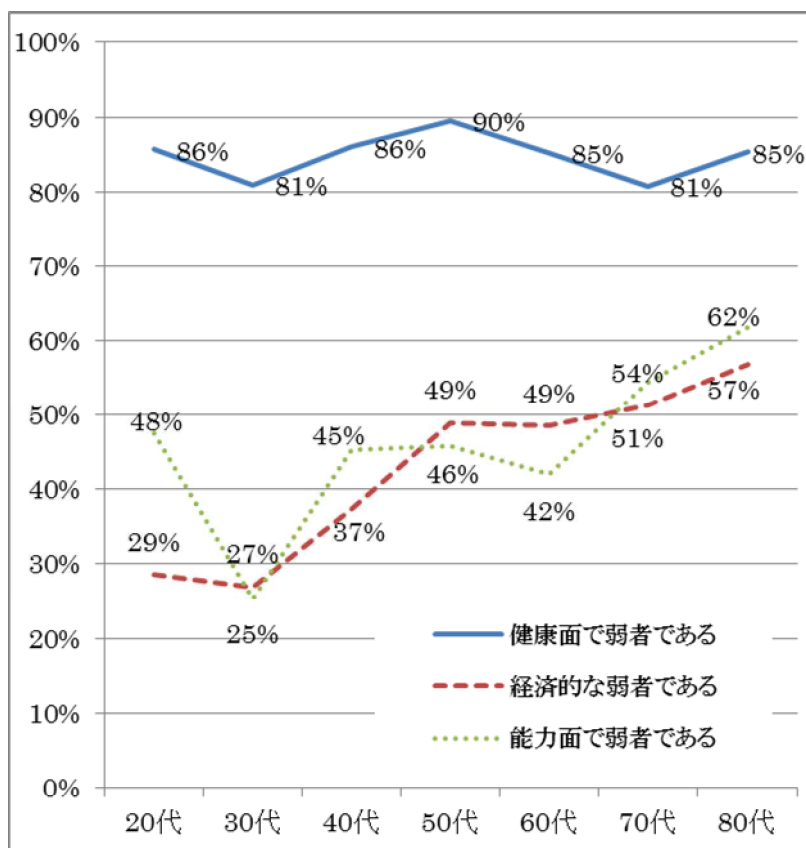
<お問い合わせ先>

特定非営利活動法人「老いの工学研究所」
大阪府大阪府中央区伏見町四丁目2番14号
研究員 川口 雅裕
TEL：06-6223-0001
E-mail：info@oikohken.or.jp

1. 高齢者の半数が、経済面・能力面で「高齢者は弱者ではない」と認識。

「高齢者は健康面で弱者か」という質問に対して、肯定した（「そうだ」「ややそうだ」と回答した）人の割合は、全ての世代で8割を超えましたが、「経済的に弱者か」「能力面で弱者か」に対しては、70歳代で半数程度、80歳代でも6割程度にとどまりました。

また、経済面・能力面で弱者とする割合は若い世代で低くなっており、若い世代ほど、高齢者がお金や能力を持つ人たちだと考える傾向にありました。



	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
健康面で弱者である	86%	81%	86%	90%	85%	81%	85%
経済的な弱者である	29%	27%	37%	49%	49%	51%	57%
能力面で弱者である	48%	25%	45%	46%	42%	54%	62%

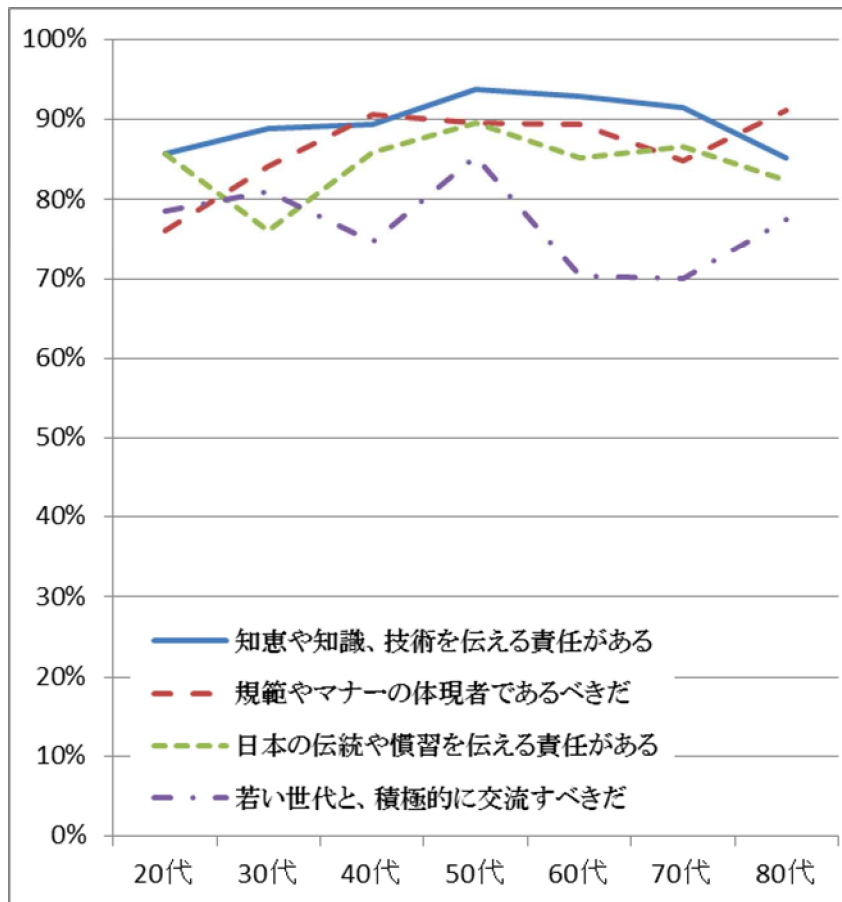
(n=851)

60歳代から80歳代の合計では、次の通りとなりました。経済的な面、能力的な面においては、高齢者の半数が「自身は弱者でない」と考えていることが分かります。

	60～80歳代
健康面で弱者である	83%
経済的な弱者である	52%
能力面で弱者である	52%

2. 高齢者の役割は「伝承」「体現」「交流」

回答結果に、世代間による違いがあまり見られなかったのは、以下の4つの質問でした。



	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
知恵や知識、技術を伝える責任がある	86%	89%	89%	94%	93%	92%	85%
規範やマナーの体現者であるべきだ	76%	84%	91%	90%	89%	85%	91%
日本の伝統や慣習を伝える責任がある	86%	76%	86%	90%	85%	87%	82%
若い世代と、積極的に交流すべきだ	79%	81%	75%	85%	70%	70%	77%

(n=851)

この結果から、世代を問わず、高齢者の役割として期待されているのは、

- 伝承（「知識・知識・技術」や「伝統・慣習」を次世代へ伝えていくこと。）
- 体現（規範やマナーを教えるだけでなく、実際に実行してみせること。）
- 交流（若い世代と、交流する機会を持つこと。）

の3点であると推測できます。

技術伝承や伝統継承といった課題は、伝統ある製造業などで既に明確になっていますが、社会的な観点からは、あるべき規範やマナーを実際にやってみせることや、伝承の場としての世代間交流が、高齢者の重要な役割として共通に認識されているのが分かります。

3. 若手世代は、高齢者に“若々しさ”より“年の功”を求める。

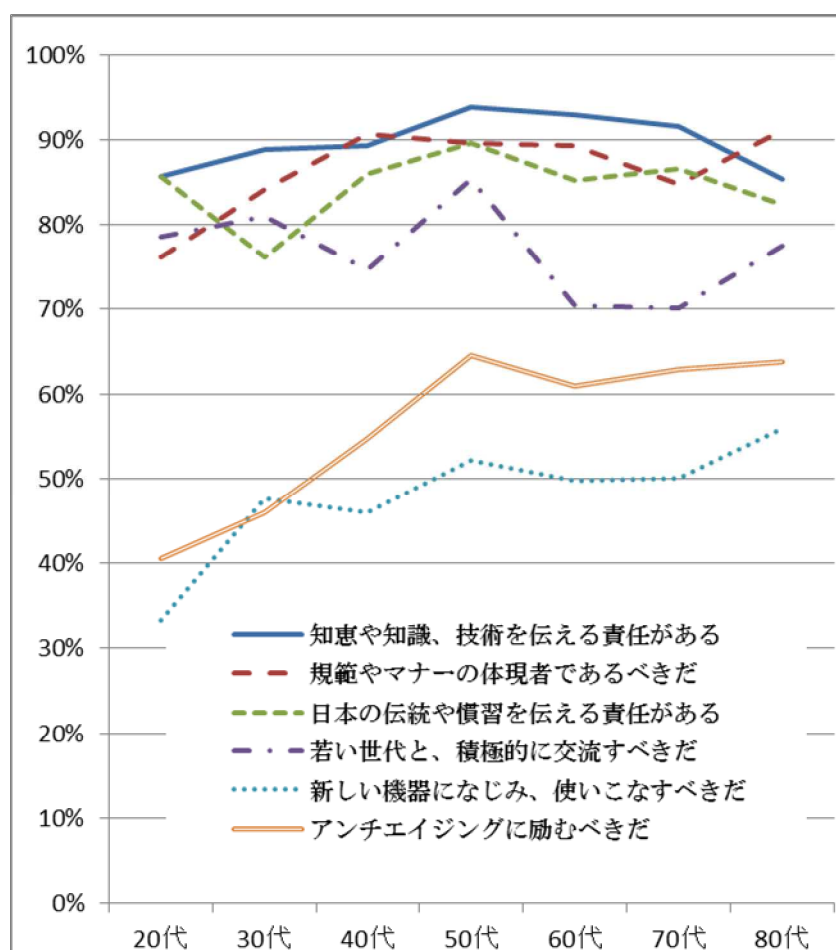
高齢者も、IT機器など新しい製品を使いこなすべきと考える人は、20歳代では約3割、30歳代以降でもすべての世代で半数程度となりました。

また、アンチエイジングに励むべきだと考える人は、年代があがるにつれて徐々に割合は増えていきますが、40歳代までは半数程度、60歳代を超えても6割程度にとどまりました。

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
新しい機器になじみ、使いこなすべきだ	33%	48%	46%	52%	50%	50%	56%
アンチエイジングに励むべきだ	40%	46%	55%	65%	61%	63%	64%

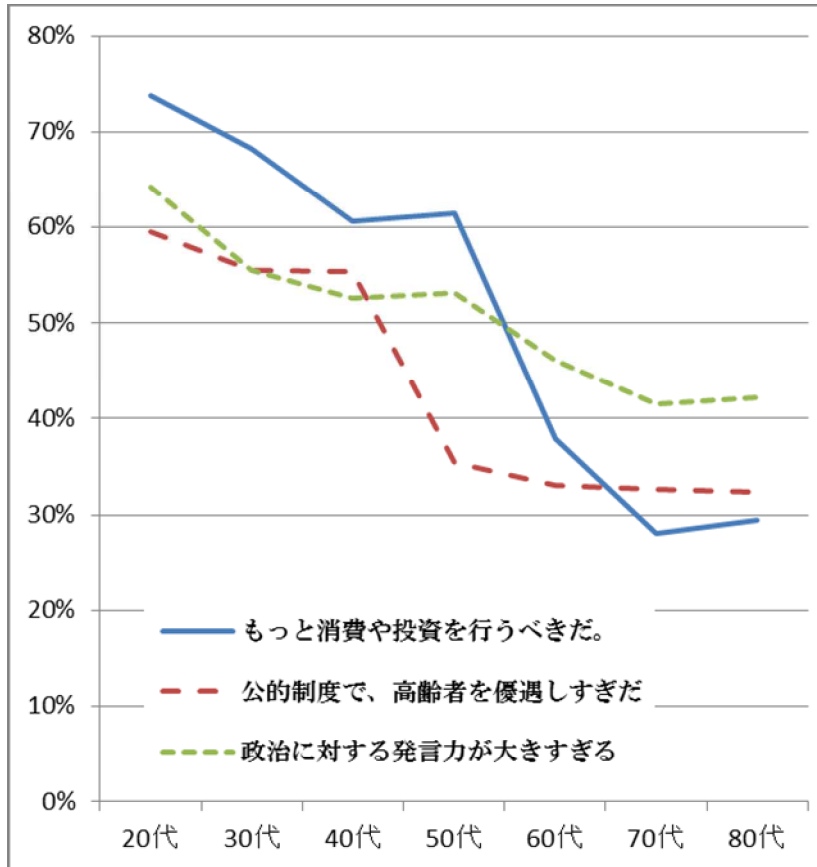
(n=851)

以下は、前ページの4つの質問項目と合わせたグラフですが、20～50歳代までには、30～40%ほどの大きな開きがあることが分かります。



このような開きから、若い世代が高齢者に期待しているのは、新しい機器になじむ、アンチエイジングといった“イマドキで若々しい姿”ではなく、いわゆる“年の功”を存分に発揮している姿であると考えられます。

4. 若いほど「高齢者を優遇しすぎだ」と考える傾向。高齢者も3割が同意。



	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
もっと消費や投資を行うべきだ。	74%	68%	61%	61%	38%	28%	29%
公的制度で、高齢者を優遇しすぎだ	60%	56%	55%	35%	33%	33%	32%
政治に対する発言力が大きすぎる	64%	56%	53%	53%	46%	42%	42%

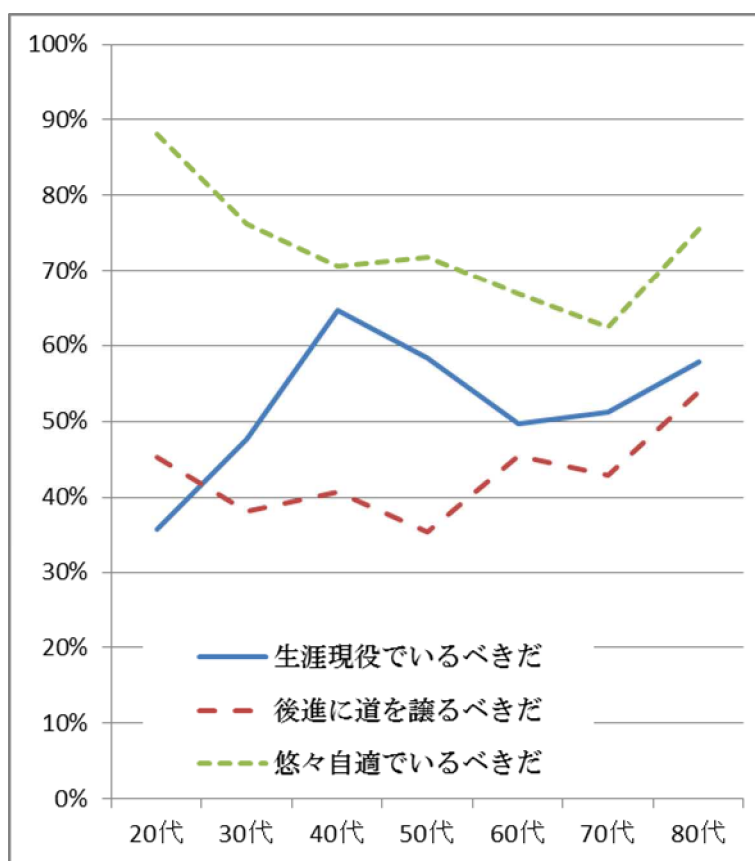
(n=851)

若い世代の6～7割が、高齢者に対してもっとお金を使ってもらいたいと思っている一方、高齢者は消費・投資に消極的であることが分かります。現役世代が高齢者を「経済的な余裕のある人達だ」と見ているのに対し、高齢者自身は「先行きの経済的不安を感じる人」「余裕があっても財産を残すことを優先する人」「お金の使い道があまりないと思う人」など多様であり、このあたりの認識のギャップが表れているものと思われます。

また、「公的制度で、高齢者を優遇しすぎだ」「高齢者の政治に対する発言力が大きすぎる」とした割合は、若い世代ほど多くなっており、社会保障の世代間格差などの問題の一端が伺える結果となりました。

ただし、60歳代以降で「公的制度で、高齢者を優遇しすぎだ」「高齢者の政治に対する発言力が大きすぎる」とした人も30～40%おり、次世代への配分を大きくすべきだ、次世代の意見を取り入れるべきだ、と考えている高齢者が少なくないことは注目に値します。

5. 生涯現役志向は低調。「生涯現役社会の実現」という方針の共感・浸透が進まず。



	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
生涯現役でいるべきだ	36%	48%	65%	58%	50%	51%	58%
後進に道を譲るべきだ	45%	38%	41%	35%	46%	43%	54%
悠々自適でいるべきだ	88%	76%	71%	72%	67%	63%	75%

(n=851)

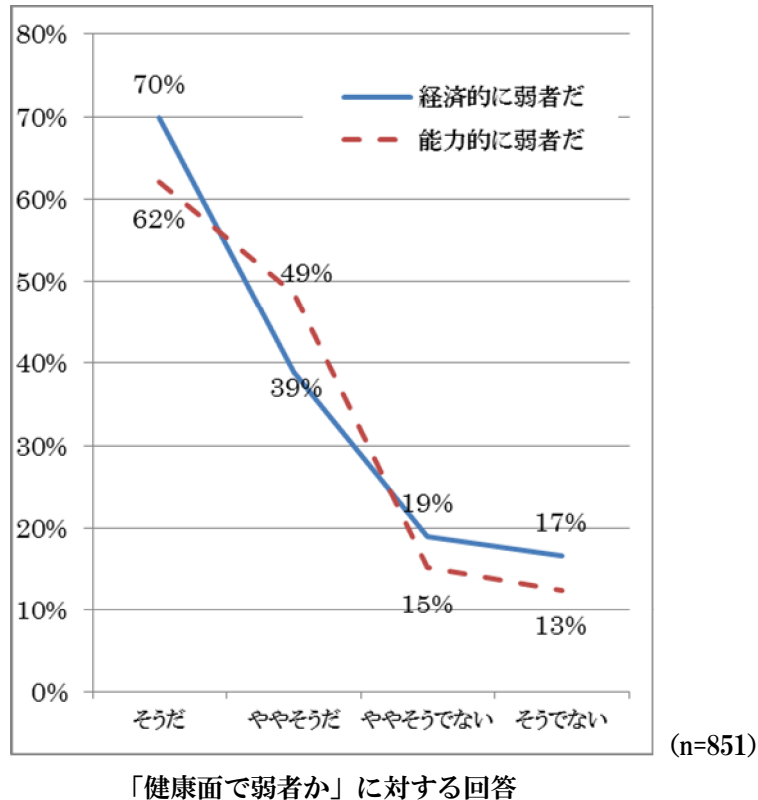
「生涯現役でいるべきだ」と考える人は、40歳代の65%まで上昇しますが、50歳代以降は50%台で推移しました。

また、「後進に道を譲るべき」が4割程度、「悠々自適でいるべき」も7割程度と、世代によらず一定の割合があり、仕事などから身を引いて、その後は静かに暮らすような、昔ながらの高齢者のライフスタイルが根強い支持を集めていることが分かります。

超高齢社会を迎えて、『生涯現役社会』の実現が国の重要方針となっていますが、以上の結果からは、この方針について共感や浸透が進んでいるとは言えない結果となっています。

6. 高齢者を健康面で弱者と考える人ほど、経済的にも能力的にも弱者とする傾向。

「高齢者は健康面で弱者か？」という質問に対する回答と、「経済的に弱者か」「能力的に弱者か」という回答との関係を見ると、下のグラフのようになりました。健康面で弱者だと考える人ほど、経済的にも能力的にも弱者だとする傾向が顕著になっています。

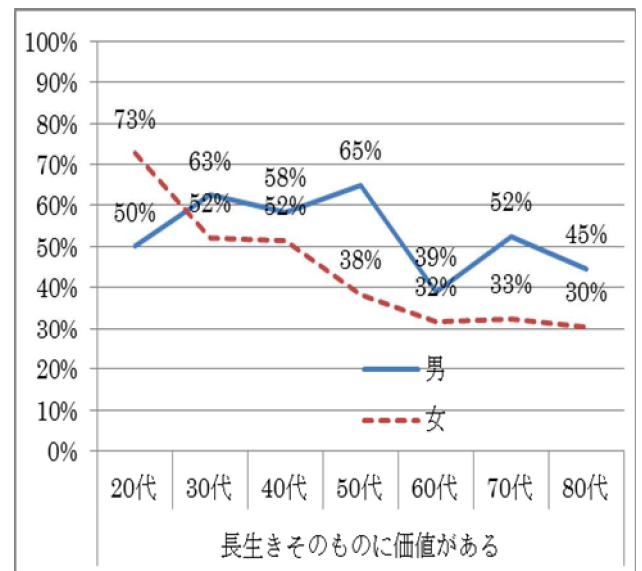
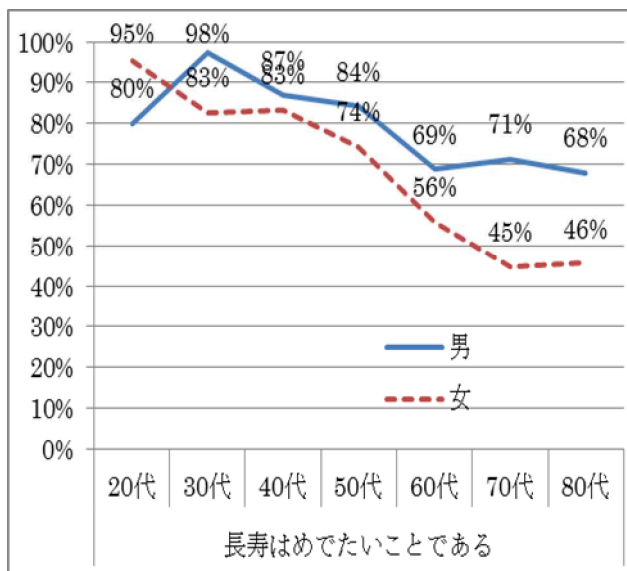
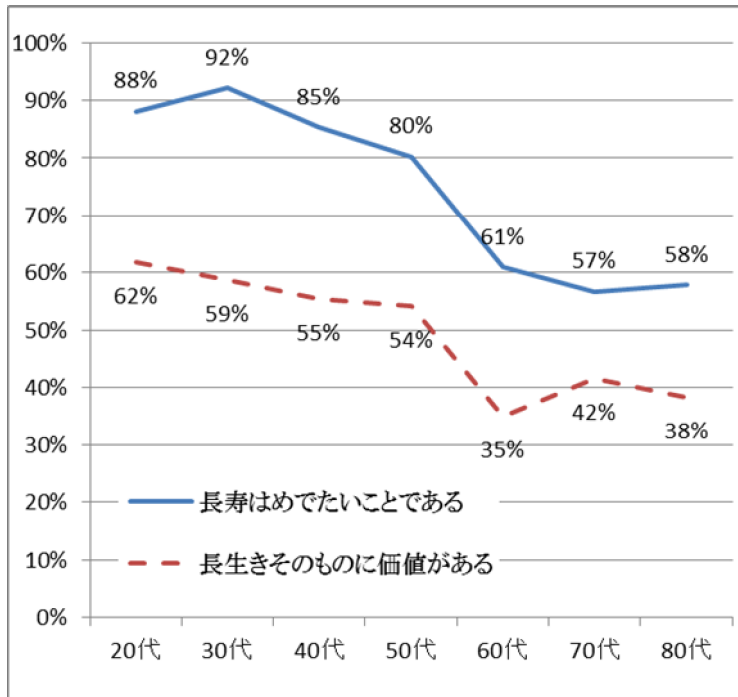


高齢者は一般に、記憶力や計算力（流動性知能）は衰えるが、知識や経験に基づく判断力や対応力（結晶性知能）は維持・向上が可能であるとされており、また、労働による収入は減るものの資産や年金などで経済的余裕のある人は多く、上のような「高齢になると、あらゆる面で衰えていく」という理解は正確とは言えません。

これは、核家族化の進行と地域における世代間の交流機会の減少で、実際に高齢者と触れ合い、高齢者を理解する機会が失われたこと、さらに、報道で重い要介護状態の高齢者、認知症患者、経済的困窮状態にある人達を目にしがちであることが原因ではないかと思われます。

このような「高齢になると健康面だけでなく、能力も衰え、経済的にも困窮していく」といった理解は、高齢者を必要以上に、かつ意思に反する形で保護したり、自身の老いに対する恐れや不安が増すなど、超高齢社会の活性化に向けて足かせとなりかねず、高齢者・高齢化に対する正確な理解が課題になるものと考えられます。

7. 女性は、寿命より充実度重視。「長生き自体に価値あり」と考える高齢女性は、わずか 30%



「長寿はめでたいことか」「長生きそのものに価値があるか」という質問に対し、肯定した人の割合は、60歳を超えると急に低下しており、自分自身が高齢になる過程で、長生きを単純には評価できなくなってくる心理が伺えます。また、「長寿はめでたい」に比べ「長生きそのものに価値がある」の割合が、全年代で低くなっており、寿命だけでなく、生活の充実度を重視していることが分かります。

男女・年齢別では、20歳代を除くすべての年代で女性の方が低い割合となり、男性よりも女性のほうが、より生活の充実度を重視する傾向があることが読み取れます。70歳超では、「長寿はめでたい」と思う女性は半数を下回り、「長生きそのものに価値がある」と考える人は30%程度にとどまりました。

●まとめ「超高齢社会を迎えての課題」

①高齢者・高齢化に関する正確な理解の促進。

- 年をとることによる心身への影響について、正しく理解する機会が高齢者にも次世代にも必要。衰えばかりをクローズアップするような報道姿勢も、影響が大きい可能性。
- 一概に弱者だと考えるのではなく、健康面、経済面、能力面を分けて評価し、高齢者それぞれの強みを発揮してもらうように考える社会へ。

②高齢者と次世代との交流機会の創出。

- 知識や技術を伝えるなど、次世代の期待に応え、年の功を発揮する場の創出。
- 世代間交流が減っている中、世代間の認識ギャップを解消する（相互理解を促進する）ためにも、交流機会が必要。

③「生涯現役志向」へ。全世代の意識改革

超高齢社会の維持・活性化には高齢者の自立が不可欠であることを理解し、「引退・隠居」という前時代モデルを脱すること。

④「生活の充実度」重視へ。高齢男性の意識改革

特に高齢男性において、人生・生活の充実度を重視する割合が低く、定年後のキャリアや人生設計について考えてもらう機会が必要。

⑤「体現者」として。高齢者の意識改革

次世代からは、伝承や継承だけでなく、高齢者自らが規範やマナーの体現者であって欲しいという期待があり、高齢者には日常的にこのような期待に応える意識を持ってもらうこと。

<調査概要>

- ・ 調査期間：2014年1月8日～3月7日
- ・ 調査方法：郵送・インターネット
- ・ 回答者：20歳～87歳の男女851名（男性424名／女性427名）

<お問い合わせ先>

特定非営利活動法人「老いの工学研究所」
大阪府大阪市中央区伏見町四丁目2番14号
研究員 川口 雅裕
TEL：06-6223-0001
E-mail：info@oikohken.or.jp